サラリーマンから教員の道を歩んだ四半世紀

上坂　昇

ほぼ４半世紀、桜美林大学でお世話になった。これまでいくつかの仕事についたが、最長は 16 年だったので、これを超えてしまった。居心地がよかったからに違いない。

大学の教員というと、ふつうは大学時代から学究の道を歩むわけだが、サラリーマンからこの道に入った者としては、しかもそれまでいくつか転職を経験している者としては、定年まで勤めるというつもりはなかった。達成感を感じられない、適性がない、自分の力が不足している、と思うようになったら次を探すというのが基本的な職業観であった。

しかし、人生の出会いとめぐり合わせがよかったのだろうか、別ルートから大学教員への道が開かれた。前の職場で、なぜかアメリカの宗教右派に関する本を出すことになった。編集の仕事をずっとしてきたとはいえ、まさか自分に本が書けるとは思ってもみなかった。通信社と出版社の勤務で雑学に接した程度だし、アメリカ政府の広報誌の編集を通してさらに雑学を経験しただけで、誰の指導もなく本を書き上げたのだ。不思議といえば不思議だが、恐る恐るそれらしき出版社に売り込んだら、二つ返事で出版を快諾してくれた。印税まで出た。しかも、大新聞の書評で大きく扱われた。専門の研究者がほとんど扱ってこなかった分野なので注目されたのだ。これで研究者の端くれとなった。

この本に興味を持たれた桜美林大学の先生で、同じ出版社から本を出していた方との出会いがきっかけで、当時開設を準備していた国際学部の教員候補として申請者の中に入れてもらうことになった。その先生は定年退職後に残念ながら亡くなられたが、開設準備の中心になっていたのが、開設準備室長、現在の理事長・総長の佐藤東洋士先生である。国際学部は平成元年４月に開設されたが、その１年前に筆者も含めて学部長就任予定の井門富二夫先生ら７人が着任した。申請業務は、カリキュラムと教員人事が同時に進行していた。いろいろな雑用の手伝いをしたが、なかでも時間割りと履修ガイドの作成にはかなり苦労をしたのを覚えている。

井門学部長は、町田の桜美林から日本の桜美林にすると大きな夢を抱いていたようで、まずは新学部のこけら落としとしてアメリカ学会の開催校として名乗りをあげ、開設２年後に実現した。本学はまだ事務態勢が整っていなかったうえ、他に学会員で着任している人も少なかったので、筆者は過労で十二指腸潰瘍を患ってしまった。次いで、学部完成年次のすぐ後には、大学院国際学研究科（修士課程）の開設が実現した。

それほど知名度が高くない桜美林が、国際学部に多彩な教員を受け入れ、４年後に定員50名の学部に連動しない独立型の大型大学院を設置したことによって、全国から注目される存在になったことは間違いない。佐藤副学長と井門研究科長はすでに、２年後には後期課程を開設する準備をしていた。休むことなく桜美林の前進は続いたのだ。

平成８年から大学院の運営にかかわるようになり、３年後には研究科長を拝命した。元サラリーマンがここまで大学運営にかかわるなど、想像もしていなかった。加えて、学部、修士課程、後期課程とすべて設置申請と同時に担当教員になったので、設置審議会の教員審査を経験した。審査のために研究業績を提出するわけだが、そのたびに結果が出るまで心配だった。まさに入学試験の発表を待つ受験生の心境である。中年のいい歳をして、審査結果を待っているなんて、精神衛生上よくない、などと一人で愚痴ったこともあった。しかも、大学院の場合は、単なる授業担当教員と研究指導ができるマル合教員とのランク付けまである。なんとか各審査をクリアしてみると、それまでお役所仕事にうんざりしていた面もあったが、文科省はサラリーマン出身者にも評価すべき点があれば大学院の研究指導を認めるのだなと見直したものだ。

井門先生は後期課程開設前に退任したが、佐藤学長の大学拡大路線はその後もペースを落とさなかった。大学職員を養成する専攻と、英語と日本語の教員に教授法を教える専攻をつくるようにと指示があった。前者は本邦初の試みである。大学職員や語学教員が果たして夜間の大学院に関心をもってくれるだろうかと疑問だった。しかし、新宿駅から徒歩２～３分のところに教室を確保して、大学アドミニストレーション、言語教育の専攻として必要な学生を確保できた。都心への進出にまずは成功したことになる。

新しい専攻の運営と並行して、翌年開設を目指して人間科学（臨床心理学、健康心理学）と老年学の２専攻の申請作業があった。専攻増の申請については、中核になる教員がすでに一人か二人本学にいることが多いが、魅力あるカリキュラム、マル合の取れる教員を揃えるのは、それほど簡単なことではない。この後、大学アドミニストレーションの通信教育課程、老年学の後期課程の開設が続き、大学院の拡大路線は一段落した。

振り返ると、平成13年から16年までに４専攻増、通信課程、博士課程研究科の合計６回の改組の申請を連続して行ったことになる。その後の学部改組などと比べると、迅速かつ効率よくいった。関係した教員や事務方の熱意やチームワーク、学長との信頼関係などが格段によかったことが原因だろう。15年余りにわたって教育組織の運営にかかわったことになるが、多くの経験ができて幸運だった。その後、学系長を２期４年をつとめたが、大学の運営方針が明確でないため、ほとんど貢献はできなかった。大学教員には、研究、教育、行政（校務）の３つの主な仕事があると思うが、できるだけ３つをバランスよく力を注いできたつもりなので、大学を去るにあたって後悔はしていない。こんなものだろうと甘い自己評価をしている。

成功談だけではない。後期課程を満期退学した学生が十分な指導を受けなかったとして、本学に対して損害賠償訴訟を起こした事件があった。東京地裁八王子支部や高裁に学長や

本部長と何度か通った。修士論文で悩んだ学生が自殺した事件も忘れられない。

総じて桜美林での 25 年は、それまでの 20 数年の社会人生活よりもやりがいがあり、充実していたことは喜ばしいことだ。退職後の人生について、確かな設計図はまだ描いていないが、これまでとはまったく異なる生き方を実践できればと思っている。また、新しい出会いとめぐり合わせを期待したい。